

若き大空は儚き笑みに恋をする

ルカ乃泉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最近家庭教師ヒットマンリボーンを読み返してツナユニのカップリングが見たくなって検索したけどあんまり数がなかったので自分で書くことにしました。

もしツナが笹川京子に惚れていなかったら、そんなIF物語。

時間が空いていたので、リメイク版を書き始めました。

ご愛読して頂いてた方、思い出させてくれてありがとうございます。

T a r g e t	T a r g e t	T a r g e t
3	2	1
30	20	1

目
次

Target 1

俺の名前は沢田綱吉。ここ並盛中学に通うごくごく普通の中学生だ。

「ヘーイツナ！パス行ったぞ！」

「ぶっ！」

クラスメイトが投げたボールは俺の手を見事にすり抜け顔面に直撃する。

「またかよツナ」

「頼むぜダメツナ！」

運動もダメ、勉強もダメ、そんなダメダメな俺についたあだ名が『ダメツナ』。

クラスメイトが零れたボールに向かって走り去っていく中、情けなく鼻血を垂らしてうずくまる俺はまさしくダメツナの語源を説明するに足る姿だろうね。

そんなくだらない事を考えながら、今日も俺はため息を零した。



「てめーのせいで負けたんだからな！」

「ご、ごめん…」

体育が終わるといつもの如くクラスメイトA、B、Cに囲まれ、怒鳴られる。

見る人が見ればいじめにも見える構図だけど、まあいつも通りだからみんな特に気にも留めない。

各々が「疲れたー」なんてぼやきながら体育館から去っていく。

「と、ゆるーことで罰として体育館のおそうじ頼むな！俺たち貴重な放課後は遊びたいから」

「えっ…そんな！」

そしてこれまたいつも通り、放課後に体育館の掃除が担当になっているクラスメイトから負けを理由に掃除を押し付けられる。

「じゃ、ファイトだダメツナ！」

「しつかりなー！」

「ちよ、ちよつと待つてよー！」

そしてそして、これまたいつも通り一人体育館に取り残される俺。我ながらいつも通りすぎて怒る気にもなれないね。

体育ではミスの連発。クラスメイトの無茶な要求もはつきり断ることができない。

こんな惨めな自分に慣れてしまった自分が恥ずかしいっていうか、一周回って笑えてくるって言うか…。

「どーせ、バカで運動音痴なダメツナですよーだ」

そんなことをぼやきながら、俺は105対12で負けたスコアボードを手に体育館を片付けていく。

……………。

……いや、ほんとごめんね。ダブルスコアってレベルじゃないよね。むしろよく手を出さなかったよクラスメイトA…。

これが俺の日常。

ダメダメで人の足ばかり引つ張るお荷物。ついでに今日のテストも当然の如く1桁。

いいところなんて自分でも探すのが難しいくらいの俺がなんでまだ学校なんかに通い続けているかというと…

ひとえに、単位が欲しいからだ。



「綱吉ー、学校から電話あったわよ。また学校途中からサボったんですって？あんた将来どうするつもりなの？」

「べつにー…」

「あんたみたいに退屈そーにしても楽しく過ごそうと一生は一生なのよーああ生きてるって素晴らしい！ってと感じながら生きてほしいのよー！」

母さんには悪いけど俺は十分幸せなんだけどなあ。

ダメツナって言われようとかうしてぐーたら毎日を過ごすことがどんなに幸せなことか…。

「…母さんそういうこと恥ずかしいから外では絶対言わないでよね」

「ま、…そうそう！ツー君今日家庭教師の先生来るの！」

「家庭教師?!」

冗談じゃない、せっかく親にも何にも言わせないように卒業できる単位ギリギリを調整しながらわざわざ学校へ行ってるっていうのに！

これじゃいやいや学校に行っていた意味がなくなるどころかこの幸せなぐーたらライフが勉強漬けの地獄へと変わってしまう!!

「【お子様を次世代のニューリーダーに育てます。学年、教科は問わず。リボン】ですって！素敵でしょ！」

「胡散臭いんだよー俺、ぜってーやだからね！どーせ何やっても無駄なんだからー！」

「ちやおっす」

言い争う俺と母さんの間に、気づけば一人の赤ん坊が立っていた。え、マジいつからそこにいたの？俺が帰った時には絶対いなかったぞ。

「3時間早く来ちゃったが、特別に見てやるぞ」

ていうか何その恰好…。黒いスーツに黒い帽子、まるで漫画の中の

マフィアみてーな格好して。

や、まてまて俺。格好の前にまず色々とツツコむところがあるだろ！

「…ボク、どこの子？」

このよくわからん状況にたまらず母さんがツツコみを入れる。

ファインプレーだ母さん。まず俺もそれをめっちゃ聞きたかった。

「ん？俺か？俺は家庭教師のリボーンだ」

リボーン。

今こいつ、リボーンって言ったのか？

「…ブツ、あははっははははは！おいおい、胡散臭い広告の主が誰かと思えばこんなガキかよ！あーはっははははは！」

俺の記憶にあるのはここまで。

そこからはいきなり視界から赤ん坊が消失。と、思いきや眼前まで一瞬で距離を詰め、華麗なベビーキックを俺の下顎に直撃させた。

4

（つてことは何？俺赤ん坊に気絶させられるの？たった1撃で？あ、まずい。どんだん床が近づいてくる…。赤ん坊より弱い俺って、ほんつとダメ、ツナ……………）

崩れゆく意識の中、俺は自分のダメさ加減に再びため息をついた。

「（想像以上の貧弱っぷりだな。…だが、最後のあの表情。まさか見えていたのか？この俺の動きが。）」

今も母親に介抱されながら間抜け面を晒しているツナを見やる。

運動もダメ。頭脳もダメ。良い所を探す方が難しい甘ったれ。

だが。

「…家光の言う通り、中々どうして悪くない素材かもな。」



目を覚ますと、眠った記憶がないのに見慣れた天井が目に入って来る。

「…ああ、そつか。俺あのちんちくりんの蹴りで気絶してたんだっけ…。」

辺りを見回すと、事の元凶である赤ん坊は床で横になる俺を放置して優雅に俺のベットで寝ている。

…この野郎。俺がいくらダメダメだからって調子に乗るにも程があるだろ。

ていうか母さん。息子が気絶した後に床で寝かせるって…。

「これもすべてこの訳の分からない赤ん坊のせいだ…。おい！起きろ！赤ん坊だからって俺の部屋で勝手は許さないぞ！」

俺は一瞬躊躇した後、思い切って赤ん坊の服を掴む。

あれ？ちよつと、世界が…回る？あ、反転した。

「ふげっ!!」

間拔けな声を漏らしながら、大きな音を立てて背中から床に打ち付けられる。

今この赤ん坊、俺のこと投げ飛ばさなかった？え、まじ??

「俺にスキはないぞ、本職は殺し屋だからな」

器用に鼻ちようちんをふくらませながら、赤ん坊がそう答える。

こいつ何を…、この赤ん坊が殺し屋？

んな馬鹿な。フィクションにしたってもう少しリアリティが…

「俺の本当の仕事はお前をマフィアのボスにすることだ。」

時が止まった。

不思議と、本当になぜかわからないけどこの赤ん坊の言葉が俺の中にストンと落ちた。

理屈じゃない。理由なんてわからない。だけどこれだけははっきりとわかった。

この赤ん坊の言っていることは全て本当だ。

「…はあ？俺がマフィア…？寝ぼけてんのか？」

「嘘じゃないぞ。俺はある男からの依頼でお前を立派なボスに教育するよう言われてんだ」

冗談で流さない。

この赤ん坊は俺の誘導に釣られることなく話を続けてくる。

「……」

「やり方は俺に任されてる。これからビシバシ行くから覚悟しとけ」

赤ん坊にしてはあまりにも不自然なくらい流暢且つ知性を感じる話し方。

ダメツナとはいえ、中学生の体躯を一撃で昏倒させられる戦闘能力。

そして今の言葉。

”ボスになるための教育”

「…なんで、俺なんだ？俺は見ての通り運動も勉強もできないただのダメな中学生だぞ？」

現状それだけが疑問なんだ。

日本で ”マフィア” なんて名乗る組織はほとんどと言って良いほど存在しない。日本では ”ヤクザ” だ。

それならばこの赤ん坊を差し向けたマフィアっていうのは海外、おおよそヨーロッパあたりの組織だろう。

だがここで問題になるのはなぜ俺なのか、ということ。

一般的にそういった組織の次期ボスが決まるのは2通りのパターンがあると思う。

1つ目は腹心の部下に次がせること。

もちろん俺はそんな組織の方に知り合いはいないし、そもそも友達だって皆無だ。

……………うん。

そして2つ目は、ボスの直系の血筋の人間に次がせること。

俺の知る限り、俺の家系にはそういった組織の方がいらつしやるとかは聞いたことがない。

だが、現にこうして目の前に「マファイアのボスに育てるために来た」なんてのたまう不可思議な赤ん坊がいるのも事実。

つまり、認めたくはないけれど俺にはそのマファイアのボスの血が流れているということになる。

「……………調べたとおりだな。バカのくせに変なところで頭が回りやがる。」

「…うるさいな、バカなのは知ってるよ！ともかくなんで俺がそんな役割をしなきゃいけないのかつてのを教えてくれよ！」

「俺はボンゴレファミリーのボス、ボンゴレ9世の依頼でおまえをマファイアのボスに教育するために日本に来た。」

「へえ…、9世ってことは9代も続いているのか。結構すごいところなんだな。」

「当たり前だ。ボンゴレファミリーは現マファイア界のトップに君臨するマファイアの頂点だぞ？」

「ぶつふうっ！…ななななんでそんなとこのボスに俺がならなきゃいけないんだよ！」

赤ん坊から超絶爆弾発言が落とされた。

アカン。これはアカン。俺の全細胞が耳を塞げと命令してくる。

これは絶対に関わっちゃいけない案件だ。なんだよ！なんなんだよ！もつとこう、ほら！片田舎の細々とした感じじゃないの!？」

もうこっからは想像つくよ！そんな大それたマファイアがわざわざ平和ボケした日本に住んでる俺を後継者にしたがるってことは…………。

「黙って聞いてろ。ボンゴレ9世が高齢ということ、ボスの座を1

0代目に引き渡すつもりだったんだが、最有力候補のエンリコは抗争の中打たれて死亡。」

「ひっ！」

「その次のマツシーモは沈められ。」

「ひいひいっ！」

「秘蔵っ子のフェデリコは先日骨で見つかったそうさ。」

「もうやめてくれえっ！」

「そんで、10代目候補で残ったのがお前だけになっちまったんだ。」

それみたことか！それみたことか！！

生々しいよ！てか全滅って何考えてんだよ！フェデリコさんでよかったですじゃん！何で殺しちゃうんだよ！

……あ、そっか。血筋以外の方々。

うおおおおお！！

そもそも9代目？はなんで俺をそんな危ない世界に放り込むのに赤ん坊を送って来るんだよ！

もつとこう、あるじゃない？「君に大切な話があるんだ…。」みたいなのをスーツ着た初老の男が話し始めるノリ！

俺この赤ん坊にもう3回はぶん殴られてるからね??

「ボンゴレの初代ボスは早々に引退して日本に渡ったんだ。それがツナのひいひいひいじいさんだ。つまりおまえはボンゴレファミリーの血を受け継ぐれつきとしたボス候補なんだぞ。」

「…何言ってるんだ。そんな話聞いたことないし、そもそも俺はマフィアなんかのボスにはならねーよ。」

とつとと帰れ。

そんな意味を込めつつ、赤ん坊をベッドから引きずり出そうと肩に手をかける。

『ピーッピーッ』

赤ん坊の肩に触れた途端、どこからか不快な警報音が鳴り響く。

「因みに俺の眠りを妨げると割と本気で死ぬから気をつけろよ。」

謎の警報とともに俺の下へ飛んで来る無数のダイナマイト。

……Dynamites?

「わわわわってめーなんてもんをおっ!!」

慌てて外に投げ捨てようとする俺、見事に転倒。

床に散らばるダイナマイト。気が付けば優雅にベッドで寝ていたはずの赤ん坊の姿は見えない。

あいつ一人で逃げやがったな!?

「くっそおー!絶対マフィアなんかにはならないからなー!?!」

俺の絶叫は、平和な日本の住宅街では聞こえるはずのない無数の爆発音によって掻き消された。



「よしツナ。これからアンケートをするぞ!」

「おいりポーン。」

あれから一晩がたった。

昨日のひと騒動で俺の部屋はほぼ全焼。

部屋のゲームやテレビ、漫画を始めとして家具全般が焼け焦げて使い物にならなくなり、俺の唯一の憩いの空間がたった一晩で消し飛んでしまった。

そんな惨状を作り出した元凶に対して抗議の意味も込め、例の赤ん

坊ことりボーンをジト目でにらみつける。

「お前、何か俺に言うことはないの?」

「悪いなツナ。身の危険を感じて思わず条件反射で回避運動をとっちゃった。まあツナも無事だったんだからいいじゃねえか。」

「なーにが回避運動だ!回避運動取るくらいなら爆弾弾けばよかつただろ!あつ、こいつ『その手があったか』みたいな顔してんじゃねーよ!絶対わざとだろ!!!」

「まあそんなことはおいといてだな。今日は折角ツナの学校が開校記念日だからな。学校があるときはあんまりこういう時間が取りづれーから、今後のために正直に答えろよ。」

俺の抗議をさらりと受け流し、話題を変えてくるリボーン。

置いとくなよ。人の部屋爆破全焼させてんだぞ?

「そんなことってなんだよ…。因みに質問は正直に答えなかつたらどうなるんだよ。」

「……雨の日は冷たいんだろうな。」

「今度は屋根か!屋根を吹っ飛ばすつもりか!?わかつたよ正直に答えるから!」

「最初からそうしとばいいんだよ。」

いけしやあしやあとのたまうりボーン。

この野郎……。

「まず1つ目だ。ツナ、お前勉強はどれくらいできる」

「…学校じゃ中の下つてところ……おいちよつとまで!無言で天井にバズーカを向けるな!わかつた!わかつたよ下の下だよ!」

「しよっぱなからしよーもない見栄を張ろうとすんな。調べられる限りならお前のことはリサーチ済みだぞ。」

「ならなんでこんな公開処刑みたいなことを…。」

「本人の口から確認することが大事なんだぞ。」

がしやこんと天井に向けたバズーカを脇に置く。

てかそのバズーカどっから出したの…?」

「じゃあ2つ目だ。心から信頼できる、もしくははいつも行動を共にしてる無二の友人はいるか?」

うつ、地味に心に来る質問しやがって…。

「…いないよ。」

「勉強もダメ、友人も0ときたか。お前ほんとダメツナだな。」

ほんとこいつ言いたい放題言ってくるな。

もつとこう、可愛げ?とかないの?

赤ん坊から可愛げ取ったら無でしょ。何でこんな辛辣な赤ん坊が
できあがるんだよ。

「…うるさいな!ていうかなんでそのあだ名知ってるんだよ!」

「言っただろ。お前のことは大体リサーチ済みだぞ。じゃあ最後だ。

…ツナ、お前彼女とかいるか?」

「いるわけないだろ!お前わかって言ってるだろ!」

「じゃあ好きな奴でもいい。そういう対象に見てる女はいねーのか
?」

……………。

あれ、いない。

俺中学生だよ。

彼女どころか好きな子すらいない俺って、流石にヤバイのでは…?

「ふー、ツナは勉強ができなくてスポーツもできない。おまけに人望
もなく、彼女どころか好きな子もない童貞ってことか。こんなんが
次期ボスとはボンゴレの未来が思いやられるな。」

どうやらアンケートが終わったらしく、やれやれと首を振りながら
ため息をつくりポーン。

「ほつとけよ、どーせ俺は何のとりえもないダメツナだよ。」

「すげーなその負け犬根性。何か一つでも取柄とかねーのか?」

「そんなものあるわけないだろ?あつたらダメツナなんて呼ばれねー
よ。」

「それもそうだな。」

『通してください。私急いでるんです』

『そんなこと言うなよお嬢ちゃん。かわいーね、どう?この後俺と一
緒にお茶でも』

『いやっ！放してください！』

リボーンのアンケートが終わるやいなや、窓から質の悪いナンパとそれに絡まれている女の子らしき声が聞こえてきた。

俺？もちろんこの場でステイしてるよ。

常に最悪の事態を想定する頭脳派の俺は絡まれている女の子が弱き善人を喰らう美人局の可能性まで考慮するのだ。

「ツナ、助けに行かぬーのか？」

「ばっか相手を見てみるよ、最近並盛で悪さしてるって噂の黒曜中のヤンキーじゃないか。俺が勝てるわけねーだろ？ボコボコにされて女の子がナンパに連れていかれて終わりだよ。」

「ほんとすげーなその負け犬根性」

「ほっとけ」

『やめっ、大声だしますよ!?!』

『ヒヒっ、逆らうと痛い目見るぞ？俺はやさしーからあんま女の子の顔に傷つけたくねーんだけどなあ？』

『っ！』

「……」

ほんの少し、ほんの少しの興味で窓の外をもう一度見る。

事が起きているのは調度俺の家の前。

俺の安息の地、マイハウスに侵入されるまであと一歩足らずってところか。

おいヤンキー。お前分かってるだろうな。俺の家の敷地内に入ったらあれだかな。

ほら、その、あー、箒。箒でバシバシってシバき回すからな。

絶対入るなよ。

…それにしても女の子の方は心なしか余裕が無くなってきてる様に見えるな。

相手の黒曜チンピラも何本か頭のネジ外れてそうだし、ああいうタイプはやるって言ったらやるタイプだ。

幸い今の時間帯この住宅街は人が通らない。
子供は学校、大人は仕事か買い物に出かける時間帯だからね。
つまりあの女の子は不幸にもチンピラに屈するしかないってこと
だ。

名も知らない女の子、南無。

『おつ、その顔いいねえ…そそるぜ』

『ひっ…いや、誰か…』

「……」

う、リボンめっちゃ見てくる。

なんだよなんだよ。お前俺のことリサーチしたんだろ？

なら俺の貧弱っぷりを全部知ってるってことだろ？なのになんで
そんな目で見てくるんだよ…！

それにまあこんな白昼堂々と誘拐まがいのことなんてしたらまず
間違いなく人目に付く。

そこから警察が特定してヤンキーの方も捕まるし、俺が行ってでき
ることなんて何も無いんだよ。
わかるだろ？それくらいさ。

『誰か…！誰か助けてっ……！』

「おいおまえっ！そうだそこのお前だ！頭の悪そうな面しやがって！
今すぐその子から離れろっ！」

2階の窓から飛び降りて道路に降り立ち、一気に女の子と黒曜性の
間に入る。

正直足が痛い、あと膝も。

あーあーあーあー俺のバカバカバカバカ勢いでなんてことしてるんだよ俺は!

ヤンキーめっちゃにらんでんじゃん俺この後ボッコボコのボコにされて、いやそれじゃ済まないんじゃない!?

「…………ふっ」

「……あなたは……」

「あああん!? テメエこらモヤシ! 何しとんじや! 俺は今その子とデートに行こうとしてたところなんだよ! 早くどけ!」

「どどどかないぞぞぞ! 絶対どくもんか!」

「誰に口来てんだもやし野郎がっ! 調子に、乗るんじや、ねえっ!!」

「げふっ! おっ、あ” うっ、お” っっ!!」

ダメツナの俺がカッコ良いヒーローに何てなれる訳もなく、想像通りボッコボコのボコにされる俺。

拳句の果てにヤンキーの拳が顎にクリーンヒットして綺麗に吹っ飛ぶ俺、超カツコ悪……。

見たかりボーン? お前これで満足か? 俺がボッコボコにされて吹っ飛んでんのは何ニヤニヤしてんだよぶっ飛ばすぞ。

「合格だぞ、ツナ。」

は?

何が?

…リボーンさん? 銃持ってたのにはもういちいち驚いたりしないけどさ。

向き逆!!! 狙うのは俺じゃなくてヤンキー!!!

お前俺とうんこの区別すらつかないのかこの赤ん坊!!!

「いっぺん、死んで来い」

は…あ…？

その時、閑静な住宅街に一発の発砲音が鳴り響いた。

リボーンが放った弾丸が俺の眉間にクリティカルヒットした。
俺、死ぬんだな…。

これでこの世ともさよならバイバイか…って今はふざけてる場合
じゃないよな。

あーあ、くっそ、もつたいない…。

死ぬ気でやればもしかしたらあの子をヤンキーから助けられたか
もしれないのに。

死ぬ気で、助けてれば!!!

「復活！死ぬ気で助ける!!!」
リ・ボーン

「えっ…えっ…／＼／＼」

「ぶっひやひやひやひや！テメーなんだそりや！曲芸か？吹っ飛んだ
と思ったらいきなりパンイチになりやがって！」

「うるさい！死ぬ気でお前をぶつとばす!!」

「ひやははは！お前みたいなモヤシが何しようどおっつ！」

常人ではありえない加速で肉薄したツナはうんこの鳩尾に渾身の
パンチをぶち込む。

うんこは道路と平行に吹っ飛び電信柱にめりこんだ。

「おい！その女！無事か！」

「えっ！あつ！はいっ！」

「そうか……ってあれ？」

あれ、俺がやったの？

俺が？何で？どうやって？

そもそも俺リボーンに殺されたんじゃ…。

「危ないところを助けていただき、ありがとうございます。沢田綱吉さん」

うぎやああああ!!眩しい!!眩しすぎる!!

なっ！この子！後光が差して見えるくらい笑顔が眩しいんですけど！

そりやあナンパするわ!!こんな子見たことないもん!!

超可愛い！顔ちっちゃ！何か良い匂いするくく！

「いやっ、そのっ、…あれ？」

やっばい生涯で一番テンパってるわ。

もうこれ以上ないってくらいテンパってる。

頭真っ白だもん。今なんか違和感あったけど消え去ったもん。

「おいツナ。気色わりーからその気持ち悪いニヤけ面はやめた方がいいんじやねーのか？」

夢、覚めたわ。もう何か一気に思考がクリアになった。

やめてくれない？そういうストレートな言葉の暴力。

心身ともに悲鳴を上げてるんですけど。

はい、違和感ね。はいはい。

「君、何で俺の名前知ってるの？」

「ん、とりあえず今ツナが考えてることは俺が全部答えるぞ。」

俺の質問に対して、女の子が答える前にリボーンが間に入ってきた。

「おじ様！」

「おっ、おじ様!?君、こいつ赤ん坊なんだけど…。」

「とりあえず中に入れツナ。さつきからおまえパンイチってこと忘れてるだろ」

「えっ、あつ、ああああああ!!」

周りを見回すと「半裸の男がいたいけな少女を襲おうとしている」という構図に見えたのか、遠巻きに噂しているおばさんにケータイを片手に何やら慌てているサラリーマンと、何やらちよつとした人だかりができ始めていた。

待て、お前ら何でうんこが女の子に絡んでる時には出てこなかったんだ。

メガネクイクイするな社畜野郎、張り倒すぞ。

俺は恥ずかしさのあまり逃げるように家に駆け込んだ。



「で、まずは自己紹介からだな。この子の名前はユニ。ジツリヨネロファミリーの現ボスだぞ。」

「ユニです。よろしくお願ひしますね、沢田さん」

あれから、とりあえず助けた女の子とリボーンを交えて俺の部屋で話をするようになった。

そして何やら女の子と面識があるリボーンに説明を求めたところまではよかった。

なに？ボス？しかも現ボス？

見た目普通に中学生、俺と同じくらいだよね？

「…うん、よろしく。ところで君いくつなの？」

「初対面の女にまず聞くことがそれか。きもちわりーぞツナ。」

「う、いやだってさー!」

「い、良いんですおじ様! 沢田さんの疑問も至極当然のことですし…。」

「全く、ここら辺も考えねーとな。…ユニはお前と同じ13だぞ。」

「お、俺と同じ…。」

まじか。

容姿が超若く見える美魔女みたいな線も考えてはいたけど、改めてはつきり言われると衝撃だ。

俺と同じ年齢で、同じ境遇。

まさかこんなフィクションみたいな設定の人間が俺以外にも存在したなんて…。

「ジツリヨネロとボンゴレの先代ボス、まあこっちはまだ継承式が終わってねーから現ボスは9代目なんだが、その二人が随分と仲が良かったみたいだな。ボス同士、お前らにもまあ仲良くしてほしいってわけで、ツナは次期10代目ボスとして、ユニはボスとしての教育をしばらく一緒に見てくれてるのが俺の依頼だったんだ。」

「え？じゃあもしかして…。」

「そうだぞ、今日からユニはお前の家で面倒見ることになってる。俺はこの町についてまだあんま詳しくねーからユニのこといろいろ頼んだぞ、ツナ。」

「ふ、不束者ですがよろしくおねがいます！」

わたわたと頭を下げるユニ。

可愛い。

こんな子と一つ屋根の下で生活できるなんてマフィアのボスも悪くないんじゃないか…。

…じゃなくて!!

「勝手に決めるなよりボーン！」

「悪いがお前に拒否権はないぞ。ちったあ喜びやがれ、同い年の女と同棲なんて滅多に経験できることじゃねー…。」

リボーンが何やら俺の顔を見て言い淀む。

自分の話を止めるなんて傲岸不遜なコイツらしくない。

もしかして俺の顔に何か付いてるのか…？

「いや、顔がきめーぞ。」

俺をマフィアのボスにすると豪語する赤ん坊の家庭教師。
そして現れた別のマフィアの女の子。
俺の生活は、この2人との出会いを経て大きく変わることになる。
そんな気がした。

…俺の顔、キモくないよね。

俺の名前は沢田綱吉。並森中学に通うごくごく一般的な中学生だ。
え？マフィア？同棲？

一体何のこと？俺にはさっぱりわからないよ。
今日もまた、俺のぐーたらダメダメライフが幕を開けるのさ。

「早く起きろ、このダメツナ！」

「あうっ！」

ベッドから転げ落ち、頭から床に転がり落ちる俺。

痛い、脳細胞が死滅した。

これは国にお帰りになってくれないと治りそうもないなあ……ああ、
ハイ。嘘です。

「起こすならもうちよつと優しく起こしてよ……。ああ、それに遅刻な
らもう少しで3桁いきそうだし別に明日から起こさなくていいよ。」
「何言ってやがる。遅刻も何も今は朝の5時だぞ。」

まったく、何故だか今日はいつもよりやけに眠いからもう少し寝
て、昼頃からにでも学校に……。

「はあ!?まだ5時!?おいリボン!どういいうつもりだよ!」

「マフィアのボス足るもの遅刻ギリギリまで寝てるようじゃ話になら
ねえ。ボスたるもの部下に寝顔なんて見せるんじゃねえぞ。」

コイツ…、まだマフィアがどうたら言ってるのか？

朝っぱらから叩き起こされるし昨日の件で足は痛いし…、あれだ
な。もうそろそろガツンと言つといた方がいいと思うんだ。

うん。そうだな、そうしよう。

「…いいか？俺なんかがそのなんたらファミリーとかいう凄いマフィ
アのボスになってみる。たちまちファミリーは崩壊、そして俺は殺さ
れ母さんにまで危害が及んだらどうするつもりなんだよ。お前、責任
取れるの?」

「甘ったれんな。それをひつくるめて全部責任を持つのがボスの務め

だぞ。ファミリィが崩壊するのも、ママンに危害が及ばない様にするのも、全部お前の行動次第なんだからな。」

この赤ん坊はどうやら俺の事を何も知らないらしい。

ファミリィの責任？母さんを殺しの手から守る？

逆立ちして鼻からスパゲッティを完食したとしても到底不可能だ。

…まったく。最近ではご近所の間でもダメツナの呼び声高い俺のポテンシャルを今一度叩きつける必要があるそうだな。

「リボーン。お前は一体俺のどこを調べてたんだ？俺の先週の期末テスト、全科目の点数を教えてあげようか？」

「国語23点、数学4点、英語0点、社会3点、理科9点。日本の、それも中学レベルのテストでこれとは流石ダメツナだな。」

知ってんじやん!!

やめて!!知ってんならわざわざ点数まで言うこたないだろ!!

…まだだ。俺は諦めないぞ。

テストの点数は把握されていたとしても、流石に運動の方は把握しきれないだろう。

「……なら俺が関わった体育の種目、その点数と勝敗。そのここ1ヶ月間のデータは？」

「もちろんあるぞ。今週だとサッカー18対0、ハンド3回オウンゴール2回。野球10対0、3回コールドのエラー10回。バスケットボール105対12、…おおこれすげーな。ツナのマークマンから75点取られてるぞ。これ相手もすげーな。」

あつてるよ!!!

何で俺でもよく覚えてないようなことごと丁寧にスコア以外の記録まで全部知ってんだよ!!

思い出して泣きそうになってきたわ!!

「で、ツナはこんなゴミデータをわざわざ俺に言わせて何がしたいんだ？」

「リボーンは馬鹿だな。こんなゴミデータを叩き出す俺なんかファイアのボスなんてなれるわけないだろ？」

俺がそう言うとりボーンは帽子をかぶり直して大きくため息をつ

いた。

目の前でつかれるとなんか腹立つな。

「それはツナが何一つやろうと思ってるからだよ。」

「は？俺はちゃんと…。」

「勉強も、運動も、何もかもお前は真面目にやる以前にやろうとすらしない。そんな人間が結果を出せる訳があるか。」

ぐ、赤ん坊の癖にそれっぽいこと言いやがって…。

「どうせダメツナだから」、”頑張ったって無駄だから”。お前は”ダメツナ”を言い訳にこれまでどれ程逃げてきた？昨日の負け犬根性も誰に与えられたわけでもない、お前のその精神が生み出したものぞ。」

…しようがないだろ。

実際その通りなんだから。

頑張ったって無駄なんだよ。無駄だったんだよ。

無駄だったから、ダメツナなんだ。

ならダメツナを言い訳にするくらい、何が悪いんだよ…。

「ツナ、このままだとこの先の人生ひでーことになるぞ。お前は意外と思考力はあるはずだから容易に想像できるはずだ。受験に、就職に、恋愛に、人生に負け続けた自分の末路をな。」

……………い。

「誰だって何もせずにできるようになるわけじゃない。だが、やろうとすら思わないお前はそこで立ち止まったままだぞ。」

……………さい。

「ツナ、お前本当にそれでいいのか？」

「うるさいよ!!!」

気づけば、俺は叫んでいた。

久しぶりにお腹の底から出した声は想像以上に大きくて、窓の外に止まっていたスズメが驚いたように飛び去って行く。

けれどリボーンは俺の声に驚くことなく、じつと俺を見つめてい

た。

「お前に、お前に何が分かるって言うんだよ。何やったってうまくいかない、勉強も運動も、何もかも……。」

「……………」

「このままじゃダメなことくらい、俺にだってわかるよ。わかってるよ。けど変えられないんだよ…、どうすればいいかわからないんだ！何やってもうまくいった試しなんてなかった!!俺はどこまでいってもダメツナなんだよ!!!」

朝5時の静かな家の中に俺の叫び声が響き渡る。

母さんとユニはまだ寝ているのか、物音一つ聞こえない。

部屋には俺とリボーンの2人きり。

叫び散らして息の上があった俺の呼吸音が、やけにうるさく感じた。

「ツナ、お前また自分の中で考えを決めつけようとしてるな?」

「リボーン……?」

「もう忘れたのか。お前のダメさ加減なんて既にリサーチ済みだぞ。」

「やれやれ、と呆れたように首を振るリボーン。」

「お前の家庭教師はこの俺だぞ?俺がダメツナなお前をみっちりシゴいて沢田綱吉に戻してやる。」

齢5歳にも満たない様な奇妙な格好をした赤ん坊の言葉は、何故か誰の言葉よりもストンと心の中に落ちて来た。

赤ん坊を家庭教師にするなんて、どう考えても狂ってる。

こんなちんちくりんに教わる事なんて何一つない。

頭ではわかっている。

けれど俺の内側から湧き出る直感が、この赤ん坊を誰よりも頼りになる家庭教師だと叫んでいる。

「今ここで選べ、ツナ。」

リボーンが俺に手を差し伸べてくる。

「このまま ”ダメツナ” として一生を終えるか。それとも ”ボングレファミリー10代目沢田綱吉” に生まれるか。お前はどつ

ちを選ぶんだ？」

馬鹿な俺でもわかる。

ここが、人生の分岐点だと。

きっとここで冗談まじりに「ええ？無理無理！ダメツナでいいよ！」って答えたなら、リボーンは何も言わずユニと一緒にここを離れるだろう。

冗談なんて通じない、リボーンの目は真剣そのものだ。

俺の決断を責めたりもしないが引き留めもしない。

完全に俺の意思に任せるって感じがリボーンの瞳から伝わってくる。

俺は…。

俺は……………。

【やーいやーいダメツナwww】

【テストは？全部赤点！運動は？ダメツナのいるチームはいつも負け！】

【お前は楽で良いなあ、俺らは過酷な中学ライフを送っているのにw】
【ダメツナはいつまでたっても成長しないなw】

【—————】

「……………あ。」

それはとても、とても単純なことだった。

そんなことで俺は人生を決めるのか。

そう罵られても否定できない、だけど否定させない。

そんなささいな、けれど心に沁み込んだ大切な一言。

俺が馬鹿にされてきたことには不思議と何も思わなかった。

俺が、俺が本気で変わろうって思えたのは……………。

「…答えを聞いてもいいか？」

俺の心の機微を察知したのか、リボーンが帽子をあげて問いかけてくる。

「うん。…俺の名前は、沢田綱吉。ボンゴレファミリー10代目ボス、沢田綱吉だ。」

…不思議な感覚だ。

沢田綱吉に、…マフィアのボスになる。

そう決めただけなのに、まるでこれまで内に引きこもっていた何か
が体の外に溢れる感じがする。

おい、なんだよりボーンその顔は。

心底驚いたような顔して、…そんなに俺の答えが意外だったのか？

「…ツナが思ってるよりマフィアの世界は甘くねーぞ？脅しじゃ
ねえ、命を落とす危険が常に付き纏う。お前に自分の命を、ファミ
リーの命を背負う覚悟があるか？」

何でそんな大事なことをここまで黙ってるんだよ…。

常って、常って、笑えるか馬鹿リボーン。

でも変えないよ、絶対にね。

こんな俺に命を預けてくれるなら、俺はそれに応えてみせる。
応えられる俺になってみせるよ。

「俺の、…俺の命に代えても。」

「——ッ!!」

あ、リボーン今絶対ポーカークラッシュ崩したな。

今のは俺でもはつきりわかった。

ふふふ、こんなゴミでクズでどうしようもない俺をマフィアのボスに育て上げるなんて難易度鬼畜ゲーをやる羽目になった自分の運命を呪うことだね。

ははははは!!根をあげても許さないぞ!キツチリ俺を育ててもらわないと俺が困る!!

俺が心の中で高笑いしていると、ドアの方から小さくノックが聞こえてきた。

「沢田さん、おじ様?もう起きていますか?何だか凄いい声が聞こえたよう……な……?」

あ、可愛い。

支度を終えて髪をまとめたユニがドアの隙間からひよっこり顔を覗かせている。

朝から超眼福だ…。

「おうユニ。調度今ツナとの話が一区切りついたところだぞ。キリもいしそろそろ朝飯にするか。」

「い、いえ。その…沢田さん?ですよね?」

口をパクパクさせながら俺の方を指差すユニ。

…なぜ疑問形なのだろうか。

髪は伸びてるけどそこまで人相が変わるくらい寝癖が酷いわけではないはずだけど…。

寝起きで顔が不細工になることも…、多分ないゾ!

「ああ、俺も初めて見た。そう考えると俺はラッキーだったのかもな。」

「ええ!?じゃあこれが例の…?」

初めて?例の?

待って待って、俺をナチュラルに蚊帳の外に追いやらないで。

「当の本人が気づかない間抜けっぷりを見るのもこれくらいいいだろ。ツナ、お前鏡見てみる。」

今流れるように罵倒された気がする。

気づかない？間抜け？一体誰のことを言ってるんだ？

もし俺の事を言ってるなら赤ん坊だろうと俺の拳が火を噴くぞ。

ユニに背中を押され部屋の姿鏡の前に立たされる。

つち、これで顔面にいたずら書きでもされてたらブチのコロさんが緊急出勤するからなりボーン！

……間抜けは見つかった。

「誰ですか？あなたは……。」

え、めつちやイケメン……。

誰？鏡の中の男の子。

これ俺？俺なの？

俺の面影がチラチラするだけでもう別人じゃあないか……。

雰囲気も顔のパーツも……、あれ？目の色まで変わってね？

リボーンもしかして寝てる間に整形手術でも施したのか……？？

「ツナの奥に眠る ”ブラッド・オブ・ボンゴレ” が覚醒した副作用だな。」

「ブラッド・オブ・ボンゴレ？」

何そのカッコいい響き。

「代々ボンゴレファミリーのボス直系の血を引く人間は、一定の期を迎えるとある特殊な能力と共に顔つきに変化が出るんだ。今回のツナのケースはとつくにその期を迎えていたにも関わらず外側から押さえ込んでいた影響でその変化が表面化した際、顕著に出ちまったケースみてーだな。」

「ちよ、ちよつとまで！特殊な能力？顔つきに変化？そんなSF染みたことあるわけ……！」

「現に鏡を見るツナ。お前の体には変化が起きた。それが何よりの証拠だろうが。」

「ぐ、ぐぬぬ……。」

改めて鏡を見る。

めっちゃイケメン。

俺が女の子なら初恋奪われて2秒でセルフ玉砕する自信がある。

…流石にここまでの変化を見せられて納得しないわけにはいかな
いよなあ…。

「それで、ある特殊な能力って何のことなの？」

「ブラッド・オブ・ボンゴレ」。それを有する人間には代々全てを見
通す《超直感》っていうものが備わるらしいですよ。勿論今の9代目
も超直感を持ち合わせているようです。」

直感、直感かあ。

超直感と直感の何が違うかはよく分からないけど、要するに勘が鋭
くなる。みたいなことなのかな。

……。

………ん？

ちよつとまで。

何でそんなファミリーの機密情動的な設定を他ファミリーのユニ
が知ってるんだ。

「く、詳しいねユニ…。」

「はい、これからも仲良くしていきたいファミリーのことですから。
それくらいの情報は共有させてもらっているんです！」

マフィアのトップに位置するファミリーのボス直径に代々受け継
がれる特殊な能力。

それが、それくらいの情報…？

いやこの子、ほんとに何者なんだ…？



ユニが朝ご飯の支度をしてくると台所へ向かい、部屋にはまた俺と

リボーンの2人だけが残された。

「な、なありボーン。ユニが来ちやつて結局うやむやになっちゃったんだけどさ。リボーンの返事、聞かせてくれないかな…？」

う、なんかちよつと気まずい。

ユニが部屋に来ちやつてリボーンからの返答も聞けなかったし…。つて、このやりとり何か告白の返答待ちみたいで凄く嫌なんだけど！

「…俺は家庭教師かてきよつて言ったはずだぞ。生徒が腹括はらくつたんだ、俺もとことん付き合つてやるから覚悟しとけよ。」

リボーンは腰に下げていた愛銃で帽子つばを押し上げ、にんまりと笑いながらそう答えた。

「…ふふつ、頼むよりボーン！」

何でだろうな、こんな赤ん坊なのにやつぱり誰よりも頼もしく感じてしまう。

コイツについていけばきつと今とは違った世界を見せてくれる。

俺は心の中でそんな予感めいたものを感じていた。

「朝飯を食つたらまずはユニと一緒に座学から始めるぞ。ちようど明日からから夏休みみてーだし、この期間で中学レベルの範囲は全部終わらせるからな。」

「ふふつ、」

勘弁してくれ、リボーン。

「とにもかくにも、当面の問題はツナだぞ」

朝食を食べ終え、部屋に戻ったりリボーンはどこからともなく冊子を取り出して中身を一瞥すると、呆れたような目で俺を見てきた。

リボーンの横からひよっこり顔を覗かせ、今も冊子を見つめるユニも何やら難しい顔をしている。

：なんだよ。

リボーンもユニも、2人して俺をそんな可哀そうな子を見る様な目で見つめて。

何か言いたいことがあるならばつきり言えばいいじゃないか！

リボーンはともかくあの優しそうなユニまでそんな顔をさせるなんて、一体その冊子に何が書いてあるって言うんだよ！

「4月校内実力テスト結果。」

あ。

「国語12点。数学8点。理科4点。社会31点。学年順位59／60。」

それは。

「4月体力テスト結果。」

その冊子は。

「握力13kg。上体起こし11回。反復横跳び18回。20mシャトルラン8回。」

ま、まさか……………。

「持久走リタイヤにつき記録なし。50m走行方不明により記録なし。ハンドボール投げ以下同文。」

「えっ…、行方不明ってどういうことなんですか？」

ユニの純粋な疑問が俺の心に激しく突き刺さる。

そう。

さつきからリボーンがお経の様に唱え続けているのは、沢田綱吉特攻の最強呪文「過去のダメツナ記録」だ。

横でユニが資料を覗いている分、呪文の威力は2倍にも3倍にもなつて俺を殺し続けている。

「……まったく、どうやったなら1試合でハンド3回オウンゴール2回なんてできんだ？ツナ、お前ゴール前で逆立ちでもしてたのか？」

違う。違うんだ。

ボールが飛んできてあたふたしてたら何か手にあたったり、「邪魔だから隅で何もするな！」って言われたからコート隅に居たら偶然ボールが俺にあたつてゴールに入ったり…。

とにかくわざとじゃないんです……。

「目は通してはいたが、改めて見ると本当にひでー有様だな。」
う。

本当にその通りだから何も言い返せない…。

「だけどな。」

リボーンは徐に冊子を閉じると、勢いよく冊子を上に放り投げた。あらかじめ留め金を外していたのか、冊子にまとめられていた用紙の数々が部屋に舞い広がっていく。

「おいーリボーンお前何してー」

「ユニ、頭下げてるんだぞ。」

昨日と規模は違えど部屋を散らかさそうとするリボーンに思わず声を荒げてしまう。

けれど俺の言葉が終わるより先にリボーンはどこからともなく取り出した拳銃を抜き、1発の弾丸を天井に向けて発砲した。

「……？」

平和な日本では聞きなれない銃声に一瞬身体がびくっと跳ねるも、正直自体が飲み込めずに呆けてしまう。

ふと、目の前にひらひらと落ちてくる1枚の用紙が目に入り、思わず手を伸ばしてみる。

「この前あった数学の期末テスト…。」

点数は4点。

まだ記憶に新しいテストだ。

特段変わりのない、俺のダメツナ記録の1つ。

…一体全体リボーンはなんだってこんな驚かすような真似を…。

「…あ。」

そう思ったところで、テスト用紙のある場所が目に入った。

テストの点をみんなの前で先生が暴露して、笑われて。

クラスメイトに改名しろって名前の欄に上から「ダメツナ」って落書きされたんだ。

「穴、開いてる。」

テスト用紙には「ダメツナ」と上書きされた箇所には弾丸サイズの風穴が開けられていた。

思わず、床に落ちた他の用紙も手に取ってみる。

「これも、これもこれも。」

拾う用紙どれもが「ダメツナ」と書かれた場所に、決まって風穴が開いていた。

「何で、どうやって…。」

銃口から出る煙をふっと吹き消したりリボーンは、地べたで用紙を握りしめる俺の前に着地すると、ぴしつと俺のおでこにでこぴんをした。

「あだっー！」

「いいかツナ。お前のダメツナなんてものは、俺にとっては弾丸1発で粉微塵にできる程度のものなんだよ。」

でこぴんされた額がじんじんと痛む。

こいつ、赤ん坊の癖に何でこんなでこぴん強力なんだよ…。

「お前を蝕むダメツナは今、俺が全員殺しきった。本職のヒットマンなめんじやねーぞ。」

弾丸1発でどうやったら宙を舞う紙切れにこんなピンポイントで風穴開けるんだよ。

そもそも赤ん坊が本職のヒットマンとか、世の中どうなってるんだ

…？

「忘れるなよ、お前の名前は、沢田綱吉。」ボンゴレファミリー
0代目ボス、沢田綱吉、なんだ。」

「…うるさい、わかってるよ。」

リボーンが何者で、どうして俺の家庭教師になったのか。

目の前でにんまり笑うコイツの事はわからないことだらけだ。

わからないことだらけで、頭がぐちゃぐちゃになってる。

だからきつと。

きつと用紙に零れた水滴は、どこかですいた雨粒に違いないんだ。



「第3問！」

「じゃ、じゃじゃん！」

「西暦645年。蘇我氏を倒して、当時の政権を握った2人の人物の名を答えてみる。」

某クイズ番組で見たような衣装に身を包んだリボーンとユニがコミカルに踊りながら問題を出題してくる。

ユニが恥ずかしそうにステップを踏んでいるの様子は、見ていても心温まるものがある。

赤ん坊と可愛い女の子。

その微笑ましい光景は、さながら幼児向け教育番組そのものだろう。

「あ、あの…。リボーンさん…？…：…よろ、し…ければ、…：…もう一度問題を…聞かせてくれませんかあっ!？」

問題の回答者が目の前で沈められかけてなければ。

時刻は昼の13時過ぎ。

ここは並盛町郊外にある森の中。そのさらに奥に位置する湖のほとり。

俺はリボーンによる地獄の強化トレーニングという名の拷問を行っていた。

リボーンは言う。

身体能力と学力を短時間で効率よく鍛えるにはどうすればいいか。そう、両方同時にやればいいと。

水着を持って来いと言われて、やってきたのはこの湖。

静かであつ、人の気配が全くしない。

並盛にこんなきれいな場所があつたなあ、と感心したのもつかの間。

リボーンの横に置いてあつたひも付きの重りが視界に入った時、自らの直感に従うべきだつた。

「この紐を身体に括り付けろ。外れないようにしつかりな。」

「…なあリボーン。これ、何か物騒なものついてないか?」

リボーンに言われた通り、紐を身体に括り付けながら身体とは反対の先端に括り付けられた”50kg”と書かれている重りを指さす。

「これは浮き輪みたいなもんだぞ。よくあるだろ、ぷかぷか浮かぶ丸い救命道具が。」

「いやでもこれ、思いつきり”50kg”って書いてあるんだけど。」

「これはメーカーの名前だぞ。強気の名前にこの刻印、インパクトあるじゃねーか。」

いや、絶対?でしよ。

流石の俺でも騙されないぞ。絶対これ50kgの重りだつて。

さつきからリボーンにばれない様くいくい引っ張ってみてるけどビクともしないもの。

明らかに重さ感じるもの。艇子でも動かぬ意思すら感じるもの。

「さて、じゃあ救命道具もつけたことだし。湖の中に入れ、ツナ。」

「断固拒否する。」

お前は俺を殺す気か。

どこの世界に自分の体重より重い重りを付けて水の中に入る馬鹿がいるんだ。

普通に溺れて溺死するだろうが。

「無駄だぞリボーン。いくらお前の射撃が凄くても所詮は赤ん坊。その体じゃ抵抗する俺と50kgの重りを湖に落とす事なんて不可能だ。」

頼むから不可能であつてくれ。

じゃなきや俺が死んでしまう。

するとリボーンはやれやれと言うかの如く肩をすくめると、腰から拳銃を取り出した。

「お、脅す気かりボーン！銃で脅したつて絶対ここから動かないからな！」

「おめーに動いてもらうつもりはねーよ。」

「ちやおす、しよつと。」

「え、うわつ。うわわわわあつ!!」

リボーンが地面に向けて発砲したと思ったら、いきなり凄い力で身体を引っ張られ、思わず尻餅をついてしまう。

どこかから引っ張られる力は尻餅をついた後も緩むことなく、身体はどんどん湖の方向へ引きずられていく。

「うつ、嘘ー！どうして?」

「周りをよく見てみやがれ。ちやおす、しよつと。」

周り…?

周りを見ろつたつて…あ!!

周りを見渡すと、リボーンが発砲するタイミングで一瞬だけ重りが宙に浮き、湖の方向へ向かって重りがじわじわ移動していた。

「確かにツナの言う通り俺の身体じゃその重りを動かすことはできねえ。が、重り自体を動かせねえ訳ではねえぞ。」

重りはじわじわと湖に近づいていき、それに伴って俺の身体もどん

どんと湖に近づいていく。

「ツナの体重は42.5kg。その貧弱な身体じゃ抵抗する力より重りに引きずられる力の方が上ってことだ。」

そしてぼちゃん、と重りが湖に落ちると同時に一気に湖へと加速していく。

「まずはその貧弱な身体をなんとかしねーとな。」

「もう一度だけ言うぞ、第3問！」

「第3問！」

そして今に至る。

俺が足と手をフルスロットルで振り回して懸命に呼吸を繋げている中、いつの間にか合流したユニと一緒に謎のクイズ大会が開かれているという訳だ。

少し前に数学、その前に英語、そして今は社会の問題が出されている。

正直問題なんて全然聞き取れないし、正答率は恐らく0%だろう。

リボンが何のためにこんなことをしてるのかは分からない。

けど、リボンは家庭教師で俺はその生徒。

なら、俺はどこんそれに付き合うまでだ。

俺を変えてくれた家庭教師ヒットマン、リボンにね。

……でも、そろそろ本気で死にそうだから助けてくださいリボンさん。

「がぼ、…がぼっぴり。リボンさん？……そろそろ。本気で…っ！ヤバいと思うんだけど…っ！」

「甘ったれるな。後5問も残ってるんだぞ？」

「……!?!?!、…ごもん!?!?!、しぬっ！死んじやう!!」

「いいぞツナ、死ぬ気で食らいつけ。」

自分の体重より重い重りを付けて、水面から懸命に顔を出す沢田さん。

鼻水まみれで溺れかけて、顔色は青くて酷い顔になっている。

いくらおじさまの指示とはいえ、最初は今すぐにでも助け出すべきだと思った。

こんなトレーニングじゃない。

ただの自殺行為、拷問だ。

そう思ってから、既に3時間が経過している。

日本へ来る前に、おじ様と同じように私も沢田さんの情報はあらかじめ知りえている。

学力も身体能力も、何もかもが本当に目を疑うくらい酷かった。

間違ってもこんな芸当ができる人物ではない。

けれど事実として、沢田さんは今も目の前でおじ様とクイズの続きをしている。

溺れながら、顔をぐちやぐちやにしながら、それでも沈むことなく。

沢田さん、貴方は一体何者なんですか……？